

序

理学療法士養成大学・専門学校の学生は臨床実習において、症例についてのレポートを作成することになります。資格を取得し臨床現場に出ても部門内外のカンファレンス・セミナーや、学会発表などで症例検討・報告を行う機会も多いかと思えます。

症例レポートは一度提出すればおしまいではなく、指導を受けながら何度となく書き直しを行い、完成させていくものです。私も20年弱前になりますが学生時代に非常に苦労した記憶が鮮明にあります。

レポート作成では、内容はもちろんですが、読み手にわかりやすく書くということが大切であり、とても難しい点です。一生懸命に書いても相手に伝わらなければ、意見交換が進まず、結果として良い治療やアプローチに結びつきにくいでしょう。学生や新人セラピストが「わかりやすいレポート」を書くことが難しい理由としては、症例についての知識や理解、経験が不十分なこともあります。書き方のコツを知らないことも多いように思います。極端かもしれませんが、患者さんやその家族が読んである程度理解できるようなレポートがよいのではと思うぐらいです。

そこで、「どうすれば第三者からみて読みやすくなるのか」、「なぜその書き方ではダメなのか」という観点から、実際の症例レポートを赤ペン添削するという書籍が企画されました。

本書の主な特徴は下記のとおりです。

- ① 臨床実習指導、理学療法治療、教育・研究に実際に携わっている理学療法士が各専門分野の疾患について執筆
- ② 学生のレポートでよくある間違いに対して、「第三者がレポートを読んだ場合に、読みやすく、かつ正しく理解できるようにするための書き方」という観点から赤ペンで添削
- ③ レポートに添削部分を示し、添削前（Before）・添削後（After）の比較ができる
 - 学生にとって：どこが良くなかったのか、指導を直接受けているような臨場感をもちながら読み進められる
 - 臨床実習指導者にとって：どう指導したらよいか悩んでいるスーパーバイザーにとって、添削のコツをつかめる
- ④ 臨床実習だけでなく、現場に出てもからの院内カンファレンスや学会報告でも役立つ

章立てについては、今後みなさんが臨床で出会う、もしくは指導に当たるさまざまな症例に応用できることを目指して疾患を選びました。臨床実習で1症例しか経験できない学生が増えてきたという背景もあり、その体験を補うためにも本書をご活用いただけるように工夫しました。

取り上げた疾患は下記の基準を満たすものに絞りました。いずれの章も学生や新人セラピスト、指導者にとって目を通す価値がある内容であると思います。

- ① 学生が臨床実習で遭遇することが多いもの
- ② セラピストが病院や整形外科クリニックで担当することが多いもの
- ③ 学生や新人セラピストの指導症例になることが多いもの
- ④ 過去の理学療法士国家試験の出題対象となったもの
- ⑤ 国内外の類似の書籍で取り上げられているもの
- ⑥ 診断名が明らかでリハビリテーション料として診療報酬の算定が可能と思われるもの

本書が1人でも多くの学生、新人セラピスト、臨床実習指導者、養成校・大学教員の方々の目に触れ、日々の臨床・教育活動に一役買い、ひいては患者様に貢献できれば幸いです。

最後に、素晴らしい企画を小生に提案し、貴重な執筆・編集の機会を与えていただいた鈴木様をはじめとする羊土社の皆様と、編集を分担していただいた美崎定也先生、石黒幸治先生、ご執筆いただいた先生方に改めてお礼を申し上げます。

2016年1月

編者を代表して
相澤純也